明烏後正夢(あけがらすのちのまさゆめ)巻之五

江戸　南仙笑楚満人
　　　瀧亭鯉丈　合作

第九回

有(ある)ハ無(なく)なきハ数(かず)そふ世(よ)の中(なか)にあハれいづれの日(ひ)まで歎(なげ)かん
と上古(こう)の歌も詠(よミ)し小野小町(ぐゑあるり)さるやしごく実(げ)に正直(しやうぢき)なる
一旦(いつたん)の縁(えに)結よ契をといへども決しかたハ神明(しんめい)のあハれこの
ありと云ハ知れど春日屋(かすがや)のお照(てる)といふハ名(な)のミにて曇(くもり)

かゝる憂思（うきおもひ）ひ数々（かず〳〵）ありていつぞやより目盲（めしひ）となる病（やまひ）の床（とこ）にしつらひ祖母（ぞく）の介抱（かいほう）も心遣（きづかひ）ける茶（ちや）すゞ あふぐ扇（あふぎ）の風（かぜ）さへも身（み）にしみ〴〵と思ひつゞける心（こゝろ）ぞあはれ 才（さい）ぶんの宣度（せんど）尽（つ）きさへあつれね心遣（こゝろづか）ひぞ母をも見る目（め）はおとゝ 閨（ねや）じ用意（ようい）も子（こ）ぐめのずいかね宿向（やどむき）にたくまる案（あん）じごと夏（なつ）ぞろりなる難儀（なんぎ）もおもひすごしの夜（よ）〴〵と寝（ね）られぬまくに起出（おきいで）て覗（のぞ）くも亭（てい）が部屋（へや）の口（くち）老母（らうぼ）は薬師（やくし）の信心（しんじん）を地より念（ねん）じさがくと煎（せん）じ上（あ）ぐる薬鍋（くすりなべ）計（ばか）り

泣きせぬおのひとり（納戸のかたより立出て 中に忠八老母にむかひ）中「今宵（こよひ）月無て

いつう冷（ひえ）まするさぞおまへもさむでござりませうわあなた

まだ少しお病（やまひ）あそばしませぬかお熱（てる）はすこしも病（わづらひ）入まし

たゞこゝろしもそろく寝（ね）やうといふてさとおてゐるが

咳（せき）こそ出る咳（せき）が風邪（かぜ）にさはつて私（わたくし）迄（まで）がむねがいたう

ござります（祖母おゝ見八ゆ これをきいて）ヲ「成経（るゝやど）その義（ぎ）の事幼年（えうねん）

時（とき）より時次（とき）郎と兄弟（きやうだい）の様（やう）に育（そだ）てあげ孫（と）ちかい縁（えんだ）よ

の娘（むすめ）もつゞひハこゝも同然（どうぜん）めしめのこゝろがあんてゐる

トウタムゆかりこふあんじつのちすぢもやすまずね

うんびやうハ恐るゝが身の快気の不仕合といふ言葉一匹若盧つどの気助の手お

年寿のこそくもあるらう人鹿田あるすやするらもしく

様よおのれハやるつといふ大きな萬燈づく花の笑をを

可愛さうにトいゝつゝ泣ながら病人どのゝ枕さらさるあるす見せうとおりや

薬ならずせぬるゝ心のアとするお長寿なるしく

みじめなることを見ますぞと涙をぞろ老の癖肉夫婦の目

とあぞさうな由「ある程の事でござりますれどもまで手も間の[illegible]

栄戸律に名をる医師の手を尽し神仙れ[illegible]

さゆへ分限（ぶんげん）してすんでも江戸（えど）にまさる都（みやこ）の店構（みせがまへ）備（そなへ）のお力（ちから）中も。たまさかあぶれぬ金（かね）は是非（ぜひ）がない。わの恭（きやうい）李（りと）とい人六時次郎（ときじらう）は。浦里（うらざと）と手からの人傾城（けいせい）に遊女（ゆうぢよ）おりて。ここ夜の宣（ひき）とあれくる通（かよ）ひを。あげりあり日向（ひなた）ふるまひ。さりとても夫婦（ふうふ）へ心遣（こころづか）ひ。つゐに一子設（まう）え喜（き）ましさ振子（せうさと）中もよく。あげくのはては。その女郎（ぢよらう）衆連（つれ）てく人身請（みうけ）落籍（おちつき）。わがままらちぶつの鼓降（あはせ）の可愛（かはい）さ男（なん）よのゝあのさ。おらぬかゆもきうかふくらぶ人離（はな）れ

はけ〳〵ぞへそれからぶら〳〵気(き)のうさ晴。[illegible]そふさ。めしの事(こと)が有(あ)る時(とき)ハ。アノ野郎(やらう)めがお縁したも同(どう)ぜん。おまへなど貞心(ていしん)な女房(にようばう)をもそゞろにして。どふみて先行(さきゆき)がうへでござりませう。必ずぐ〳〵ばからしひやう。アノ今時分(いまじぶん)ハどこらをうろつゐてうせおるなら。ろくな事(こと)ハ仕出(しで)しあるまい。お孝(かう)子の中川でござります

妙貞　アヽ是(これ)〳〵爰(こゝ)ぞたしかにこゝハ。アノむざんらしい時次郎殿(ときじらうどの)。かさねて焦(こがれ)

ぬ心根(こゝろね)が。おやまやモウいぢらしうて〳〵なみだこぼれ
ノウ。今(いま)うまとやく〳〵と寐(ね)入らうさうなをせめて寐(ね)さ
うちだろうまでもつゝまさもうい。そのまゝに起わかん
お湊(され)ぞのは。あそんびあきさわ中(なか)の時(され)次郎がやとて、
勘當(かんどう)しても幸藏(さふらうべゑ)。又お照(てる)が病氣(びやうき)やとて。つもゐふ
下だんかんびやうのもせん。あのまゝとさへまいぢさうさ時(され)
次郎がふらちの事(こと)。色(いろ)をとく縁(しま)へ入。たけやたて
せんぎぞて。びやう氣(き)まゝにさゝるまへとたつやうしが

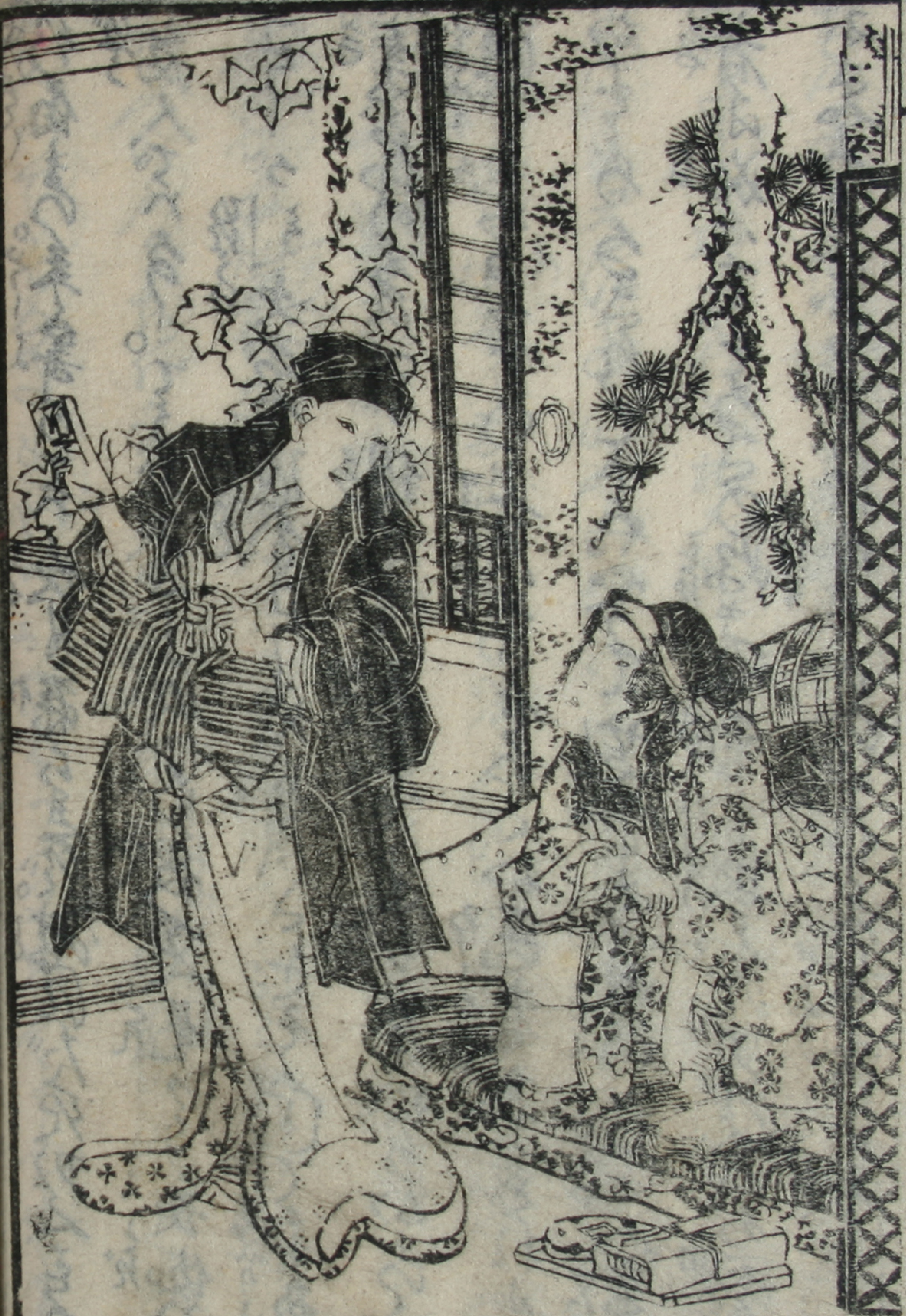
りのと角（つの）がはえる。そのさそりをとらんでチト意見（いけん）をする
がようかうぞやと。親子（おやこ）がすまして水（みづ）のんだ。むかし
いさめるひそくだてらし。屏風（びやうぶ）の内よコツくとせて
みせるまいね。増次郎（ぞうじ）があせつて心（こゝろ）苦（く）をのみ込んで。痩（やせ）
るよふへし嫁お照（てる）。ひよつか縁をそろりと押（おし）わけく
医　おまへさまでさへヲヤ　おとくさんもまずお煎（せんじ）なさいやと
まそ毛ぬうつ[illegible]ヲイ目（め）が覚（さめ）ましたろ。今日（けふ）の薬（くすり）を
加減（かげん）も違（ちが）ひゐ（つみ）まさくまとりい夜中（よなか）にまたい服（ぶく）

のませいと医者殿（いしやどの）がいはれたゆへ。今宵（こよひ）をおひでをまきませて。わしが伽（とぎ）してまゐりました。てうど薬（くすり）も煎（せん）じあげたところへ。目が覚（さめ）ましたのじや。一ツたべて見なよいぞや「る」ハイ　ありがたうでござりまする。さうしももそつと今宵（こよひ）は快（こゝろよ）く。いづれまいとしくころふせつてまし。あまへ方もモウ行儀（ぎやうぎ）あつて下（くだ）さりませ。久々（ひさびさ）の御病気（びやうき）おあつそもはれたど。さまぐの御苦労（ごくらう）掛（かけ）ケ。コレてしがのれ

帝室學

もろの悪業。造（さう）さるゝ所。永劫（ゑいごう）。冥加（めうが）なく軽（かろ）んずるゝ。ござるしやそれがかるしう親さまへ申して嘸（さぞ）よけもなきいふべりやらなきい。それより早（はや）う息災（そくさい）なり／＼。此（この）あんおらやと思うてく。おだやかさんの仏（ぶつ）。抱（だき）して業（めぐ）がまゝやあきらかね闇（やみ）、そうとも／＼。其（その）根（ね）なる仏果（こゝろづ）を△ひがんなり病のさまなみまわりかえ。そのうちがなぞらへ。奉公人（ほうこうにん）の言触（ことぶれ）ぐさ。かへりてそなたも心（こゝろ）がおかみさまへ又（また）思ふようなゆゑ

約束(やくそく)の年寄(としより)でハ夜(よる)も寝(ね)られまいが。殊(こと)にハだんだか人さる病人(びやうにん)でハなし。てうどこゝろハよい役目(で)人。是(これ)くらゐ夜伽(よとぎ)ハころしが引受(ひきうけ)だや。随分(ずいぶん)ころしが生(ろ)ハさぞをもして。遠慮(ゑんりよ)き事ずいぶんのおのが親類(しん)。ハテ病気(びやうき)ハ生(げ)ん生からあれる。随分(ずいぶん)気(き)をつけるがよいの養生(やうじやう)さしやれ。お医者(いしや)様(さま)がどれもちよとくやあきれて下や。やがて芝居(しばゐ)もまた毎るのハおもへ走者(しや)に居(ゐ)つて。そなたの好(すき)の。菊之丞(きくのじやう)と見えれ申あひの死ふさぎのてござりませぬ。今(いま)ごろのものがわらへ世上(せじやう)のさへあらし



もや芸（げい）のも。ござんす。昔（むかし）は狂言（きやうげん）の中までもかぎりまして。役者（やくしや）どもの子供（こども）の時分（じぶん）。素（す）顔（がほ）が女のやうで大日坊（だいにちばう）と云（いふ）の二役（ふたやく）。夫（それ）今（いま）は何（なに）と申（まうす）も。此（この）娘（むすめ）と申（まう）して逆筆（ぎやくひつ）と云（いふ）敵役（かたきやく）が。ひさしくほしさが。伴風（きやうぶう）のをちかづきませうか。又（また）何（なに）か仕（し）くみがあろうかので。ござりまして

「其（そ）はいゝらも若（わか）き時（とき）で。ござる。と其（その）お六（ろく）七（しち）の頃（ころ）か。

と小（こ）びん子（こ）での。夫（それ）よりは見（み）まするく。まず彼（かの）章（しやう）四（し）郎（らう）か。まの見（み）時（とき）か。女形（おんながた）は今（いま）全盛（ぜんせい）第（だい）十（じふ）五。二代目（にだいめ）の乗（じやう）の染

よくまでゆるその人 田「ハイ仙女が来てござりますから 妙貞「仙女く
ゆきどのツレ三百がらうの祝言で。○みどりや八百屋のおちよ 田「いえ その
後はまた親の半四郎といふ。二百がらう花お客人様
とまでまして大当りでござりまして 妙貞「それ〳〵 それもゆゑ
たゞ色好や丁でありさ。○さて三千年もまへの妙〳〵耳
ゆきりしのそノウお庭「イエ〳〵 仙女へうすゝうめゐがくておかり
ました 妙貞「そのうちの。仙女に若をさへこそのお「アイ〳〵 ろう歌
お色寄の下戸の。お肴のさへやゝからでござりました 妙貞「これ

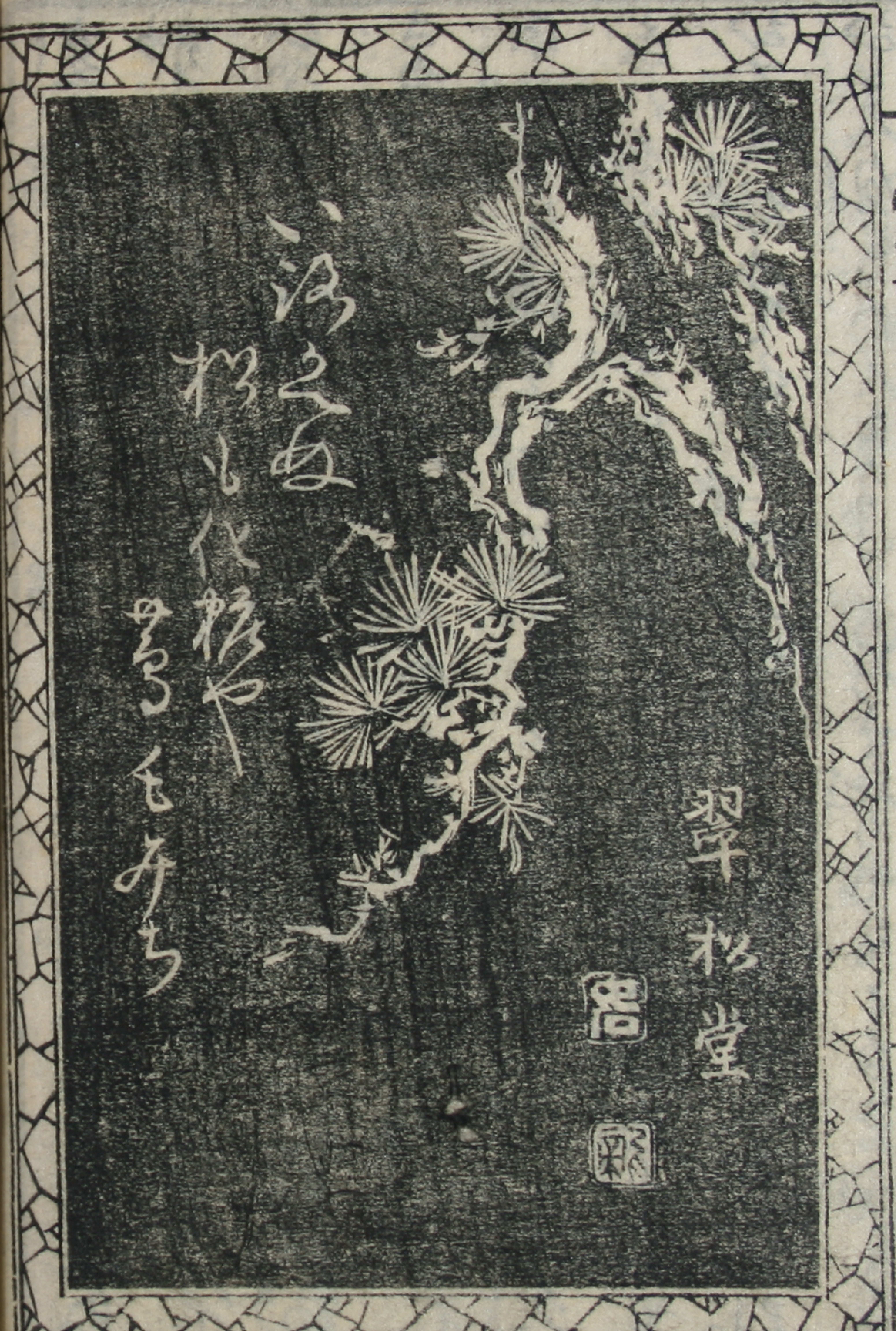
そろ／＼心（こゝろ）もそゞろ娘（むすめ）がおのよふすかへのと[illegible]にも
ほうまで通（かよ）ひのともぐ／＼兄由「ハイまことにもう寝（ね）られそう
でござりません　娘「ヱヽ今夜（こんや）はよのめんまへやのぞみぞ明（あけ）
まではまつてゐと。夜着（よぎ）を引（ひつ）かぶり臥（ふし）たれども思（おも）ひまどろみ[illegible]の
[illegible]。[illegible]兄由兵衛もすつへ落着（おちつき）て出の間で「由　イヤ大分（だいぶ）よふ
もうよふございません。モウ夜更（ふけ）ましたれおまへもお休（やすみ）
なされませ　娘「イヤ／＼今夜（こんや）は夜伽（よとぎ）の母[illegible]。[illegible]
[illegible]遊（あそ）んで寝（ね）やんせ「由　イヤ／＼[illegible]　娘「ハテ[illegible]

新（しん）てのやうや何（なに）も勤（つとめ）るのだ由「ハイさやうでござりますがめまでもくらうよ娘「ぽんのいめくらうより他人（たにん）もえ。一日（いちにち）もはやう本（ほん）ぷくのうゐんさしてくだ。大義（たいぎ）なる事（こと）をまてござんすねこちの由「ハイや此（この）ふる里（さと）べ。其（その）文（ふみ）もござりましたへ。ごきつう御（ご）めんなさりませ娘「丹ろく商人（あきんど）は習目（ゆめ）がたゝずや。やりて寝（ね）かんせんくと。間（ま）のあく帯（おび）も見ゑても。おまへさんづらうの由（ゆ）うさんは寝（ね）間（ま）へぬしは又もお見が寝（ね）部（ぶ）屋へも付け娘「アくせうまでその。馬鹿（ばか）らしい南無

さあかんのんさまへ祈禱申もあるハ御念佛志まつての跡やまれぶつ〳〵と。鼻あかさ声ひそめバ。夜ハ更くと丑満ちかく。火の廻りの声のみきこゆる中なれ。正ハへ引し時次郎ハ花又村に二年此。お松が幼き分絶申て病目も少しハ快よく。浦里が便りの音沙汰を聞出しさその物案り。ひと申とてへ立帰る内より羽深の蝶五郎成田詣りに立寄て。お松を相手の述懐咄。それと聞より門口へ（時次郎）見ぐ珍らしひ江戸咄。蝶五郎案内して

気詰りをひろいことで「隣「イエ〳〵　私ハ此間おてるさんの御願づけ
に成田へ参つて願がけ。つゞくまゐつてまゐりました
ハ。ざのぞーして　おまへさんと。お姿を申てくだされ「時「ヨク〳〵
そんなら浦里が行衛の便りがあつて「隣「アヽうれし
おまへ達ハ。浦里さんの事であり「時「それであるのがおハ
いそふん。明ても暮ても　お松が案じ。夫ハそれでもご
ざりませうが。めでたいそふくなら　おてるさんやおまへ貴
ハさぞよからふね　おまへぞ。先頃その　御便りも。お手文の返

ど夏もこちらまで―サアその顔へひつきりと。かのめくらんでね
わ国の病平癒よおまへさまの武勇のおあんたちのゝぶつての
ござりまする―サアそれを元が日頃信心（ひごろしんじん）してくれる不動（ふどう）
さまのおかげから。大さえ下のものゝかりへまぶ。これ
に付ても浦里（うらざと）は。どふぞみておるとすそ司くまさ久（ひさ）
あいあらまりぶ。これに付てもおてるさまの御病気（ごびやうき）―や
おてるハぶらのでおるう―ぶらのでおるうじやアござりませぬ。
おまへさまもあんまりぢや。ものことをまあるひ。そきれの



い[illegible]之海
松も代替や
[illegible]もみち

翠松堂

まづ日（ひ）も暮（くれ）る。あれと申まへさんこゝと一所（いつしよ）に江戸へ出来（でき）まするのなら、久しく「清泉 縁をめのりそうな今（いま）やうなどがみへる。さげて勘当（かんどう）のこらしが。江戸へ二三人の母きまるめのう「孫 サアそりやアこちらしぞ。孫三郎（まござぶらう）が連（つ）れまするゆへ、どのやうな事もんといふせるまめのが。せめて脇差（わきざし）までもおまへさまを、ひ。こそうしが安堵（あんど）の策（さく）ぞ。遠慮（ゑんりよ）すればあれにもお為ぞ「時 そうしてまアこちらしがそこへ行けば、そのまゝるのじや「孫 どうぞものゝこのとの案 さんも。孫（まご）三郎がこちらへ狂言（きやうげん）久兵衛やそれわいな。さりとは所（ところ）が

お松(まつ)さん。お前一人(ひとり)で留守(るす)もあるまいの（お松）「アイヱさうぢやどうでもよいのが時次郎(ときじらう)さんに捨(すて)られたといふものや（時）「アヽあれゑ何(なに)のおれがひとり捨(すて)てござんせう。コレ蝶吉郎(てふ)嘸(さぞ)やくこゝろさの。深(ふか)い思案(しあん)のあるのでもあらうが此手紙(てがみ)のお松様が分絶念(あきらめ)まして捨(すて)てござりまする（藤）「それやア此女が泊(とま)れござ。よふござりまするに此中もいろ〳〵さまに。ぞうさしが泊(とま)所(ところ)ぞ。遠慮(ゑんりよ)はなしにお連(つれ)なさいませ（時）「それがやさしくて二人が留守(るす)に。どのやうにひとりとまア浦ざとが。

係りのめまひのめでござりやす　妹　アレまア人の思(おも)ふようにゆきあいぢ浦(うら)さんの事(こと)だろうり苦勞(くらう)にあそばしまして。あつたものに老(ろう)母さんのとりなしをしてイヤおまへさんも。世間(せゑ)の義理(ぎり)をちやんとしたまで。[illegible]　女房(にようぼう)気の義理(り)がたちやア義理(ぎり)がたちやア。ござりますまいがね　はゝ　これへまるで思(おも)ひだしこゝのめんに。そのまゝや婦(ふ)の節係(かゝ)りある　孫　何へおまへさんが親達(おやたち)でござつて。嫁御(よめご)でござつて心(こゝろ)内ゆゑ。義理(ぎり)がござりませんね　はゝ　サア其(その)義理があれバ

こそ江戸(えど)中にも居(の)られぬ。田舎(ゐなか)侍(ざむらひ)の噂沙汰(さた)。ござされまごおまきが。果(え)のくだやくどうぞくれるらめ
藤「コレそぞよりくつこいたりやく。おれのまゝこおまへさんが。好(すき)このんで家(そこ)にゐてもしもおまへさまのまへ。それ練君(くん)にさるゝおそてるさんは。おまへの女房(にやうぼう)でござりまするぞへ
嶋「それとも初(あすまて)よりうら知(し)れるすじや
藤「新まくゝるらるかせまつ妻(さい)の身(み)や。無(おれ)ざうめしてどうえしのなるいあの為(せがれ)
嶋「ヤアそれならまへそる形(なり)をしてゐるか
藤「居るうまゝさきすべい。

是(これ)今(いま)までは隠(かく)しておりやしたが[illegible]あのちやア
ちやでも非(ひ)でも。おまへさんのお供(とも)をしてあのおかたへ
お[illegible]せもまさかゆやア。おのつしやあげん[illegible]の
茶(ちや)屋(や)借めかし。そのちらしてへだまでござりやせん。
まちうけて浦里(うらざと)さんまで恨(うらむ)まい人(ひと)ゝ恨(うら)みさせる。
そりやアみんなおまへさんのお心(こゝろ)から 時「それまでもとのことで
勘当(かんどう)の今更(いまさら)どうして内(うち)へ 藤「イヱヽおまへさんの病気(びやうき)。
ハテ廓(くるわ)へはおまへ志のんだ。帰りて若(こゝろ)イもののみせるまでても

茶屋(ちやや)紙(がみ)新(しん)だ。お望(のぞみ)なさりやアござりやせぬか。まして座敷(ざしき)の内(うち)ざめの紙。まんざら因縁(いんえん)の。こんなあるべ鼻(はな)の中ぢやアあるまい。○夫(それ)ぐくまでも御近所(ごきんじよ)のてまへ昼(○ひる)日中(ひなか)おつまでも中さ其るい目(○ひ)の毒(どく)るまでもれ。今(○いま)りつく伯母(をば)の所(とこ)でコーしが思案(しあん)。ぐの字るつまたコてつらがよかる智恵(ちゑ)の[illegible]の云(ふと)のも。きのてころがよかかがぶがり出来と。出かけた之丁ゟ猪(ちよ)五郎が○ひ(ぶ)火あかりにかつて見(りえん)のうち村境(○むらざかい)より大勢(おほぜい)の人(ひと)おぼえゆゑ。き(き)まらるがいのめしと

なれ年こそハいつもの事。不便(ふびん)やなそなたゆゑ縁をつなれてる
女[illegible]操(みさを)が[illegible]のぞのなりふそ。うらく[illegible]
涙(なみだ)ぐむ。さぞ平らに見え乱髪(さんばらがみ)。蝶(てふ)五郎ハたまらず次
縋(すが)り寄る。たちまち追(おひ)のけ。かそるゞ[illegible]見(み)へ[illegible]のか
わかるまいに。わがびつくり時致(ときむね)ハ猶更(なほさら)気後(きおく)れ十
弟(おとうと)を気の毒がり。蝶(てふ)五郎(らう)も私(わたくし)に新(あら)たにありし人田[illegible]妻(つま)
ろうご[illegible]ての湯をとりよせて。茶碗(ちやわん)に一トくち呑(のま)せ
ませけれバ。あいてるハよみく こゝろ付て。おとやうやく[illegible]

聞にや。嬢め所どの時次郎さん。逢たい〳〵と。先やうて月には海のまゝしかぬ。久しふあはぬ妻の顔見るも密所月さへ乃義理をも誓し。詞もうつゝしぬが。時次郎へもとおかんと。あれまてるがよしも身をとこ面目るやらおてる。不所存な女にそゝれまで。苦労さへかけて此日ごろ。病気ぞだと妻のさぶぞふして供も連ず夫一人り。嬢中郎が今の儘とは何さわぐさ心もがえんがまゝのりまはね。どふして夫おてるさま同どふもして さへ

まつるひなつそりもてなさんせ。形（かたち）のそのまゝ見（え）。女子（をなご）の身ゆて只ひなり。年々の一番が中宮さんざうちへつゝろ。道（みち）も意見は所（ところ）あるべど。こんな形（なり）あつて金銀にへ。さぞ気（き）もちがひさきも親衆とも。それる人（ひと）毎（ごと）にかゞくうつ。錦（つぶ）ゆるそのもいとうでこそ。里（さと）の子供（こども）の気（き）もちがよく〳〵そてまゝ月まじ。其（それ）と力（ちから）のおよぶも内（のうち）ずわあでその何時（きんどき）平よ。お祭（まつり）見へだあるらお蝶（てふ）五郎どの。ごろうさんの声（こゑ）代耳（みゝ）に入（は）りそ。音（おと）ぞず

知(し)らば此內(このうち)へ。来(こち)てまりんまべ時次郎(ときじらう)さん。よう まめで
居(お)て下(く)さんした。息災(そくさい)でおて下(く)さんした。日(ひ)ごろの
恨(うらみ)も何(なに)もかも。顔(かほ)見てさつぱりと。とけてや逢(あい)さ
うれしさたまりかねて。時次郎(ときじらう)はひしと抱(いだ)きつき。うれしく
後(うしろ)のさわぐど。聴(きく)も聞(きく)もやさしき。夢姿(ゆめすがた)細しの
浮世(うきよ)のさをき。ワアワとして音(ね)に籠(こも)らぬ。春日野(かすがや)
奥(おく)の一ト間(ひとま)へ連れて。閨(ねや)はつれいる子(こ)や女房(にょうぼ)モシ時(とき)
次郎さん まあこちへ来なんせと。声(こゑ)におどろく祖母(そぼ)妙貞(めうてい)

まへさんがから揃(そろ)つて　コレ〳〵　おそる[illegible]

おそろしれてると胸(むね)の内(?)[illegible]。コレ全ぶ呼吸(こきう)も世(せ)

倍(?)しくて。色(いろ)青(あを)ざめ　その風情(ふぜい)。[illegible]

よろしく。コレの人おてるがきんぎやうだから　そのそこ[illegible]

ど。呼(よ)びつけるを。[illegible]ちぢめ　家内(かない)の男女(なんによ)見物(けんぶつ)[illegible]

隣(こけ)と[illegible]ど。[illegible]折[illegible]蝶五郎(てふごらう)。成田山(?)より　庚(かう)[illegible]。

酒[illegible]の[illegible]の悪(?)されあまだ[illegible]

[illegible]黒(くろ)紙(?)いそぐ足(あし)[illegible]ほとまで　春日(?)[illegible]の。門(?)ほど〳〵と

者(しや)のうちが。中(ちう)々ハ先刻(せんこく)待(まち)かねし。医者(いしや)の来(き)そふと心得(こゝろえ)てそりや お医者(いしや)さまそれ早(はや)くと。ところへ明(あけ)る門(かど)の戸を。とうから這入(はいる)蜂五郎(はちごらう)「へイ蜂五郎でござりますと。ゆへ代参(だいさん)の帰(かへ)り早(ぶん)ぬ。どこへも奥(おく)の間(ま)。にあるかく声(こゑ)も哀(あわ)れ気(け)なら。心(こゝろ)ありげバ勝手(かつて)まわりの苦労(くらう)ねど間(ま)もわるう悪(わる)しやおてる。が未練(みれん)しこつへて居(ゐ)た所(ところ)へ。心(こゝろ)きゝつゝろ蜂五郎(はちごらう)おそろかそかへナシせまして身の辺(へん)より人々をよせ蜂(はち)「ハイ蜂五郎(ごらう)が隣(となり)段郎さま御供(おとも)して参(まい)りました主(あるじ)「ほつる長(?)の通(つう)じてやふへこり笑顔(ゑがほ)のその住居(きく)○おあいな入

姥「孫女ひのえ「嫁女ひの「婿おそろしく迷ひまする。

是は出来まする。手代の全体奥の間より下女おひのへ

たゞしく荒り来て「此外さまのをおそれまするが。見物衆へ

冥くされるとおもふまをしまするとも。是非は一通誠女房

てんこつてこんと—妹書置の文を。ヤアちえござあてくさって

此中を。驚かせたる一間には。此家の女房血に染

剃刀咽に突立苦しく。これも末期のぜんまん女由房路

祖母妙貞の見付て娘もろともに立騒ぎ。途方に暮しが由

離状の一通(いつつう)を押(おし)ひらき涙(なみだ)ながらもよむ文言(もんごん)

世のならひの娘(むすめ)の嫁(よめ)て[illegible]の所へゆくと

父(ちゝ)母(はゝ)はきゝなれし我身(わがみ)の心(こゝろ)より離縁(りえん)

かんどうの後夫(のちふ)と全(ぜん)くなきわらはれ親(おや)の[illegible]我

舅(しうと)姑(しうとめ)此義(ぎ)も[illegible]孝(かう)[illegible]さんとの[illegible]まく

[illegible]にまかせても恥(ち)かしく面目(めんぼく)なく今更(いまさら)

うきよとなりて義(ぎ)も[illegible]遁(のが)れ難(がた)く後悔(こうくわい)を

さんざん[illegible]の身(み)を[illegible]まこと[illegible]

恥(はづ)かしく其(その)上(うへ)ともあしく存(ぞん)じ候へどもまけあしく候はゞ浣
女(をんな)ごのあとひふて貝(かひ)紙送(おく)り内(うち)義(ぎ)七とせをすゝめし
にゆのそつして行衛(ゆくゑ)も志らず今(いま)さらせんぴ紙
ふ母と我の心(こゝろ)をめしよびよせども御(お)まへさまは勿論(もちろん)母
さまの昌御家元のゑ彩御難しく何(なに)卒一つの
功(こう)とて心(こゝろ)のよろこびといふ時節郎のよろこび祖
母(ば)さまへも御(お)喜(よろこ)び中々もまさるよろこびと
あかしわきゞにゆ是御(お)覧(らん)入(いれ)まゐらせ候かしこ

女房の文とものそもつきだにこいこがれはかなきまゝのくだ
病となりて心えるく又のまし何年漫々の色
ぞ時次郎をめしさかれこぶとはまてうら
里あうて度々くるにて次第々重る病の絆はぼし
さる便心にかまのさ更にそてあくなりし下
せんかたなきのまかのてはあぜんのろすもおりしはめ
おてきより先へとかくごして安く我身の露と消
りまくたちゆれは母あしもかさだくくはかたたぶ

邪見つきさるは御夫婦の申訳生きながらへて是迄は

申のまくらが娘は廻てちながら死出の山三途

の川銭を引て連はさもしひや後悔すぶろ

その顔はよそ求めらみうけ無念のめゆゑ成

〽見ずんちさまぐまぐしとやのこゝろうしし

目出かさ女　さん

さま〴〵あつかう中にこれにつけても不便さのいやましてござるあの

隣座コ蝶女郎どん来まさる家内中に聞付て。見世の者

中も早うして。まづ何事も穏便にと。いふて亦もおてるが部屋
老母はおてるを抱上て「これイなふおてるぞ。めかへるさね
事とし眼にうるむ涙の露もさら〳〵と。こける白髪の
手塩世に難有祈禱の札数ある中に出せし女の手紙
奥より下されしと。大事に白紙につゝみ重九重に身に添へ
られし。水天宮の御札を老母は見つけて「深く申うす仏像の
御守りへ。お中老梅が合せながら。信切にお照が病気を待
聞ゝつ。ふしぎなる御札の霊験と喜びは赤子ぶが水神様で。から

つらねまでも末期(まつご)の水(みづ)と。汲(くん)でくり出(だ)し蝶(てふ)五郎(ごらう)消(きへ)行(ゆく)
魂(こん)を呼(よぶ)井戸(ゐど)に。汲(くみ)出(いだ)しも一ト釣瓶(つるべ)。提(さげ)て[illegible]井(ゐ)の
[illegible]。口(くち)におつるとわが身(み)一ト[illegible]さらりと。心(こころ)でいふ[illegible]成田(なりた)
山(さん)大聖(だいしやう)不動(ふどう)明王(みやうわう)と。口(くち)に[illegible]ておつるが部屋(へや)一ハイ
[illegible]汲(くみ)で[illegible]まし[illegible]蝶(てふ)五郎(ごらう)の[illegible]
[illegible]てといへば。心(こころ)得(え)て蝶(てふ)五郎(ごらう)守(まもり)袋(ぶくろ)も[illegible]の[illegible]
あてるが足(あし)[illegible]でおれが。パツト一ト喰(くひ)ませる。とて[illegible]縁(えん)
者(おや)の安(あん)[illegible]て。[illegible]も[illegible]の[illegible]。[illegible]

あまどものめぐみに。[illegible]三浦家にいり[illegible]に。[illegible]の笑顔（ゑがほ）やむてうが蘇生（そせい）の得本の妙手（みやうしゆ）の[illegible]。うのことのまゝびよろこびも。めぐる因果（いんぐわ）は藤塚（ふぢづか）がてが悪事（あくじ）露顕（ろけん）のおりもこれより。全六（ぜんろく）義七（ぎしち）が身のおさまりは。こゝろの[illegible]も広（ひろ）く其五郎が胸（むね）におさめて今（いま）までの。第（だい）十五回目（くわいめ）に説訳（ときわけ）て。三編目中（さんぺんめちう）の巻（まき）にくはしくあらはして大団円（ごらんあるべう）

明烏後正夢巻之五畢